

青年期における過去の傷つき経験を契機とする成長と被受容感および自尊感情との関連

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

勝間田 冬華

横浜国立大学教育学部

堀井 俊章

問 題

心的外傷後成長 (Posttraumatic Growth)

従来、心的外傷後ストレス障害 (Posttraumatic Stress Disorder: 以下, PTSD) をはじめとして、ストレスフルな体験がもたらすネガティブな側面に関する多くの研究がなされてきた。一方で、ストレスフルな出来事は、それを体験した人々にポジティブな変化をもたらすことがある。このようなポジティブな変化を表す概念は複数存在するが、最も代表的なものとして心的外傷後成長 (Posttraumatic Growth: 以下, PTG) (Tedeschi & Calhoun, 1996) が挙げられる。

PTG とは、「危機的な出来事や困難な経験との精神的なもがきや奮闘の結果生じるポジティブな心理的変容」と定義される (宅, 2010; Tedeschi & Calhoun, 1996)。Tedeschi & Calhoun (1996) は、PTGを測定する「外傷後成長尺度 (Posttraumatic Growth Inventory: 以下, PTGI)」を開発し、①他者との関係、②人間としての強さ、③新たな可能性、④精神的 (スピリチュアルな) 変容 (以下、精神的変容)、⑤人生に対する感謝の5因子をPTGの中核として抽出した (Calhoun & Tedeschi, 2006 宅・清水訳 2014)。

先述の通り、PTGは心的外傷後成長を意味するものであり、文字通りとらえると心的外傷、すなわちトラウマを引き起こすような出来事がきっかけとなって生じる成長を指す (宅, 2014)。しかし、PTGのきっかけは狭義のトラウマに限定されず (宅, 2016)、様々な出来事や経験が該当し得る。例えば、Losavio et al. (2011) は日常的なストレスによっても成長が生じることを明らかにしている。一方で、飯村 (2016) は、本邦のPTG研究において、死別以外のストレス体験に焦点をあてた研究知見が不十分であることを指摘している。

以上のようなPTGの存在は、必ずしも直接的にwell-beingを増したり、苦悩を減じたりするものではない (Calhoun & Tedeschi, 2006 宅・清水訳 2014) が、一方で、新たな困難に立ち向かうための心的準備性 (Janoff-Bulman, 2004) や自分らしさの形成、社会全体としての希望 (宅, 2014) につながる可能性がある。さらに、近藤 (2012) が「長い年月をかけたもがきと苦しみの中での格闘の日々があることは間違いないが、未来に希望がないわけではないということを示したい」と述べているように、PTGの存在はストレスフルな体験に苦しむ人々にとっての希望となる可能性があるといえる。

PTGに影響を与える要因

先行研究から、様々な要因がPTGに関連することが示されている。本研究では、それらの要因の中から被受容感と自尊感情に着目する。

被受容感とは「自分を支えてくれる他者の存在を感じ、自分は他者から一定の理解や暖かさ、承認をもって大切に扱われ、支えられているという認識と情緒」 (杉山, 2002) を指す。岩本 (2016) は、危機的体験時の他者からの受容感が、危機的体験を通じた自己成長感へ直接的に、また意味の付与を媒介して間接的に影響を与えることを示唆している。さらに、ネガティブな経験に対して「自分を成長させてくれた」と意味づけている者は、「過去・現在・未来にわたってネガティブな経験から否定的な影響を受け続ける」と意味づけている者よりも他者からの支えを感じていることが示されている (松下, 2007)。以上のことから、被受容感はPTGに影響を与える要因であると推測される。

続いて、被受容感およびPTGに影響を与える要因として、自尊感情に着目する。自尊感情の定義は研究者によって様々であるが、本研究では、複数の先行研究に基づ

き「自己に対する肯定的な見方や価値ある存在としての感覚」（岡田・小塩・茂垣・脇田・並川, 2015）として自尊感情を定義する。自尊感情に影響を与える要因の1つに、ソーシャルサポートが挙げられる。例えば, Zhao, Kong, & Wang (2013) や Zhou, Wu, & Zhen (2018) は, ソーシャルサポートの知覚が自尊感情を高めることを明らかにしている。

ここで, ソーシャルサポートを受けた者が抱く感覚として, 先に述べた被受容感が想定される (石原, 2013)。先行研究では, 知覚されたサポート (城, 2012) や受領されたサポート (近江・田名場・田名場, 2004) が被受容感を高める一要因となることが明らかにされている。つまり, ソーシャルサポートの知覚および受領が自尊感情と正の関連を示すのであれば, ソーシャルサポートによって生じる被受容感と自尊感情との間にも正の関連性があると推測される。実際に, 被受容感の低さが自尊感情を低下させること (杉山, 2002) や被受容感が自尊感情や肯定的な自己スキーマと正の関係を示すこと (小林・大久保, 2020 ; 岡田, 2011) が報告されている。さらに, 滑川・横田 (2008) は縦断研究デザインによる検討から, 被受容感が, 時間を隔てても自尊感情に影響を及ぼすことを示している。なお, これまでに「他者に疎まれる, 嫌がられる, といった対人関係の心細さ」を表す概念である被拒絶感 (杉山・坂本, 2006) も, 自尊感情 (櫻井, 2014) や受領したソーシャルサポート (中野・稲谷, 2008) と関連することが明らかにされている。そこで, 本研究では, 被受容感と併せて被拒絶感もPTGおよび自尊感情に関連する要因として検討していくこととする。

また, 自尊感情は, PTGを予測する重要な要因となる可能性があるため, 複数の先行研究で取り上げられている。例えば, Taku & Britton (2018) によれば, 自尊感情の高さがPTGを経験する可能性を高める。加えて, Zhou, Wu, & Zhen (2018) は, ソーシャルサポートが自尊感情を高め, 希望を介してPTGを促進することを示唆している。一方で, 自尊感情と成長には有意な関連がないこと (Abraido-Lanza, Guter & Colon, 1998 ; King, Scollon, Ramsey, & Williams, 2000) や, 自尊感情と成長が負の相関関係にあること (Ben-Ari, Shlomo, & Findler, 2012) も報告されている。このように, 自尊感情とPTGの関連に着目した研究は多数あるものの, 未だ一貫した知見が得られていない。また, 従来のPTG研究は成人に主な関心が置かれてきた

ため, 得られた結果は必ずしも青年に当てはまらない可能性がある (Taku & Britton, 2018)。

これまでの研究で明らかにされてきた被受容感と自尊感情, および自尊感情とPTGとの関連を考慮すると, ネガティブな経験後の被受容感が, 自尊感情と正の関連を示し, さらに, その自尊感情がPTGと正の関連を示す可能性があると推測される。しかしながら, これまでに他者からの受容感とPTG, 自尊感情とPTGについての検討はそれぞれなされてきたものの, 被受容感とPTGにおいて, 自尊感情を媒介とする間接的な関連を仮定した検討は行われていない。

傷つき経験

多くの人が経験しやすいネガティブな体験として, 傷つき経験がある。傷つき経験とは, 「主として, 親しい他者からの意図的・無意図的な言語的攻撃や関係性攻撃を受ける中で, 『他者との関係性の中で自分は相手から低く評価されているという知覚』から生じる傷つき感情が核となる体験」を指す (小田部・加藤・丸野, 2009a)。言語的攻撃とは, 悪口を言う, からかうなどの直接的な言語による攻撃のことであり, 心理的ダメージを与えることを目的として自己概念に攻撃するという特徴を持つ (Poling, Smith, Taylor, & Worth, 2019)。一方で, 関係性攻撃は, Crick et al. (1999) によって「受容関係や受容感, 友人関係, または集団への仲間入りに危害を加えること (またはその脅し) によって, 他者を傷つける行動」 (磯部, 2001) と定義されており, 仲間外れや無視などが含まれる。このような傷つき経験によって生じる心の傷は「日常型心の傷」 (小田部, 2008) と呼ばれ, 従来の心理学研究において「心の傷」の中心として扱われてきた「トラウマ」と区別される。

小田部・加藤・丸野 (2009b) によれば, 「トラウマ」と「日常型心の傷」とは大きな差異性をもちながらも, 同じメカニズムで説明可能な類似性をもっており, それらが位置づけられ整理されることによって, 「日常型心の傷」の理解とケアに関して「トラウマ」研究から得られている知見やそこでの理論を利用あるいは援用したり, また逆に「日常型心の傷」研究から得られた知見を踏まえて, 幅広い視点から「トラウマ」研究を捉え直すことが可能になるとされている。そこで, 「日常型心の傷」という概念の整理が, 日常的に心が傷つく経験から得られるPTGを検討する研究の発展につながる可能性がある

青年期における過去の傷つき経験を契機とする成長と被受容感および自尊感情との関連

と述べている(小田部他, 2009b)。さらに, 傷つき経験の長期的影響としてポジティブな影響が報告されている(小田部他, 2009a)ことから, 傷つき経験はPTGのきっかけとなることが推測される。しかしながら, 傷つき経験を契機としたPTGに関する数量的な検討はこれまでにほとんどなされていない。そこで, 本研究ではPTGのきっかけとして中学時代の傷つき経験に着目する。中学時代に着目する理由は, 中学時代が小学校や高校と比べて言語的攻撃や関係性攻撃が顕著に現れる時期であり(秦, 1990; Teicher, Samson, Sheu, Polcari, & McGreenery, 2010), 中学時代の傷つき経験はその後の心理状態や対人関係に特に大きな影響を及ぼす可能性がある(小田部, 2011; Teicher et al., 2010)ためである。また, 実質的なポジティブな変化は, 成長につながる対処や認知的処理が可能になるための十分な時間が経過後にこそ起こりやすいこと(Calhoun & Tedeschi, 2006 宅・清水訳 2014)を踏まえ, 本研究では大学生を対象に, 中学時代の傷つき経験の回想を求め, PTGの検討を行う。小田部他(2009a)によれば, アイデンティティの形成が重要な課題の1つである青年期において, 傷つき経験の記憶は自己のヒストリー構成過程における重大な準拠点となり得る。また, 山田(2004)は, 過去の経験に対する現在における意味づけについて, 「苦しかったからこそそれを乗り越えて得たものが個人の自己形成にとって重要な意味を果たしていることが推察される」と述べている。このように, 青年期において過去の傷つき経験をどのように捉えるかということは発達の視点からも重要であると考えられる。

以上の議論を踏まえ, 本研究では, 次の仮説について検討を行う(Figure 1)。第一に, 傷つき経験後の被受容感の高さが直接的にPTGと正の関連を示す。第二に, 傷つき経験後の被受容感の高さが, 自尊感情の高さを介して間接的にPTGと正の関連を示す。なお, 先行研究では, 関係性攻撃被害による否定的な影響は, 言語的攻撃被害による影響に比べて大きいことが明らかにされている(小田部他, 2009a)。加えて, ストレスの程度によってPTGの実感が異なること(Park, Cohen, & Murch, 1996; Tedeschi & Calhoun, 1996), PTGの発生メカニズムがストレス体験領域によって異なること(宅, 2005; Tedeschi & Calhoun, 2004)を踏まえると, 諸変数間の関連が傷つき経験の内容によって異なることは十分に考えられる。そこで本研究では, 傷つき経験を関係性攻撃と言語的攻撃に分類し, 多母集団同時分析によって, 傷つき経験の内

容間で諸変数間の関連が異なるかどうかについても検討する。

目的

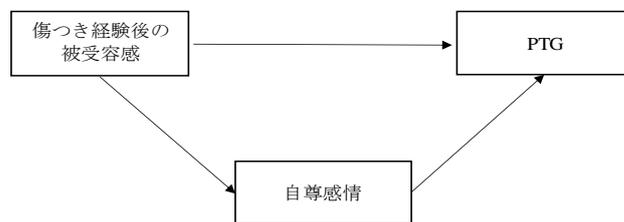


Figure 1 本研究における仮説モデル

本研究では, 「傷つき経験後の被受容感の高さが直接的に, または自尊感情の高さを媒介して間接的にPTGの高さへと関連する」という仮説モデル(Figure 1)に基づき, 大学生を対象に, 被受容感と自尊感情および中学時代の傷つき経験を契機とするPTGの関連を検討する。さらに, 上記の仮説モデルについて, 傷つき経験の内容による差の観点からも検討する。

方法

予備調査として, 先行研究から日常的な傷つき経験の事例収集および傷つき経験のカテゴリ分類を実施した。先行研究(Leary, Springer, Negel, Ansell & Evans, 1998; 永井, 2018; 小田部他, 2009a)を参考に, 傷つき経験を「日常的な対人関係において, 他者からの意図的・無意図的な言語的攻撃や関係性攻撃を受ける中で, 『他者との関係性の中で自分は相手から不当に低く評価されている』という知覚による傷つき感情を生じさせる経験」と定義し, 従来の傷つき経験および対人場面でのネガティブな体験に関する7文献(橋本, 2003; 堀田・杉江, 2015; 森田, 2011; 永井, 2018; 近江他, 2004; 小田部, 2008; 小田部他, 2009a)から, 定義に適合する40事例を収集した。なお, 本研究では, 過去の対人関係における傷つき経験を扱うため, 収集された40事例の語尾をすべて過去形に変更した。そのうえで, 心理学を専門とする大学教員1名と心理学を専攻する学生4名でKJ法(川喜田, 1967)をもとにした分析を行った結果, 「拒絶」「裏切り」「不公平な扱い」の3つのサブカテゴリからなる【関係性攻撃】と「不当な扱い」「不信」「誹謗・非難」の

3つのサブカテゴリーからなる【言語的攻撃】の2カテゴリーに分類された。

調査時期および調査協力者

2021年11月17日から12月8日にかけて、大学生267名（男性118名、女性145名、その他4名、平均年齢20.73歳、 $SD=1.28$ ）を対象に、調査を実施した。

手続き

Google フォームを用いた無記名式の Web 調査を実施した。なお、倫理的配慮という観点から、調査の際、次のことに細心の注意を払った。①調査への協力が自由意志であること、および回答の回避・中止が可能であること、②個人情報保護されること、③回答は研究以外の目的に使用しないこと、④研究終了後は個人の回答を調査者が責任をもって処分することを説明した。特に、⑤回答中に嫌な気持ちになりそうな場合などはいつでも回答を中止してよいことを強調した。その上で、研究協力への同意が得られた者を対象に回答を求めた。

Web 調査の構成

①フェイスシート

性別と年齢について回答を求めた。

②傷つき経験の有無を問う項目

予備調査で分類された6つのサブカテゴリーの傷つき経験について、それぞれ経験の有無を尋ねた。なお、Crick & Grotpeter (1995) が示した関係性攻撃の代表例、小田部他 (2009a) が提示した7分類の具体例および各攻撃行動の定義と、本研究で収集された事例を照らし合わせ、各サブカテゴリーに対して、代表的な2つの具体例を示した (Table 1)。続いて、PTGI の回答にあたっては、1つの出来事に特定してもらう必要があるため (宅, 2021)、小田部他 (2009a) に倣い、複数の出来事を経験したことがある者には、それらの中で最も傷ついたと感じるものを1つ選択するよう求めた。

③被受容感・被拒絶感尺度

杉山・坂本 (2006) によって作成された尺度であり、「被受容感」(8項目)と「被拒絶感」(8項目)の2つの下位尺度 (全16項目5件法) から構成され、信頼性および妥当性が十分に確認されている。本研究では、傷つき経験後の過去の状況について尋ねるため、項目の語尾をすべて過去形に変更した。

Table 1 傷つき経験のカテゴリーおよび例示

- | | |
|----|---|
| a. | 拒絶された (例: 仲間外れにされた, 無視された) |
| b. | 裏切られた (例: 約束を破られた, 自分の知らないところで話が進んでいた) |
| c. | 誹謗や非難を受けた (例: 嫌なことを言われた, 欠点や失敗を指摘された) |
| d. | 信じてもらえなかった (例: 自分が悪くないことを自分のせいにされた, 信頼されなかった) |
| e. | 不当な扱いを受けた (例: からかわれた, 表面的な判断をされた) |
| f. | 不公平な扱いを受けた (例: 他の人と比較された, 他の人と違う扱いを受けた) |

④日本語版 Rosenberg Self Esteem Scale

Rosenberg Self Esteem Scale (Rosenberg, 1965) の日本語版 (以下, 自尊感情尺度) (Mimura & Griffiths, 2007) である。原版同様の単因子構造 (全10項目4件法) であり、信頼性および妥当性が十分に確認されている。

⑤日本語版外傷後の成長尺度

Tedeschi & Calhoun (1996) によって開発された PTGI の日本語版 (Japanese version of the Posttraumatic Growth Inventory: 以下, PTGI-J) (Taku et al., 2007) である。PTGI は「他者との関係」(7項目), 「新たな可能性」(5項目), 「人間としての強さ」(4項目), 「精神的変容」(2項目), 「人生に対する感謝」(3項目) の5下位尺度 (全21項目6件法) から構成される。日本語版作成時には「精神的変容」と「人生に対する感謝」が分離されず、18項目4因子構造が確認されている (Taku et al., 2007)。しかし、Hirooka, Fukahori, Taku, Togari & Ogawa (2018) が再び PTGI-J の因子構造を検討した結果、21項目5因子構造が確認され、因子に基づき構成された各下位尺度は、十分な内的整合性を有することも確認されているため、本研究では21項目5下位尺度を採用した。

結果

中学時代の傷つき経験の有無

有効回答者267名中209名 (78.28%) が中学時代に1つ以上の傷つき経験があると回答した。特定された1つの傷つき経験の内容は、「拒絶」が53名 (25.36%), 「裏切り」が45名 (21.53%), 「誹謗・非難」が49名 (23.44%), 「不信」が31名 (14.83%), 「不当な扱

青年期における過去の傷つき経験を契機とする成長と被受容感および自尊感情との関連

い」が 16 名 (7.66%) , 「不公平な扱い」が 15 名 (7.18%) であった。すなわち, 他者から攻撃を受けた経験 (以下, 被攻撃) の関係性攻撃タイプが 113 名 (54.07%) , 言語的攻撃タイプが 96 名 (45.93%) であった。以降の分析では, 209 名のデータを扱った。

各尺度における被攻撃タイプ別の差

まず, 被受容感・被拒絶感尺度の下位尺度得点, 自尊感情尺度得点, PTGI-J の下位尺度得点の記述統計量と α 係数を算出したものを Table2 に示す。続いて, 各尺度得点における被攻撃タイプ別の差を検討するために t 検定を行った (Table 2)。その結果, PTGI-J の「他者との関係」 ($t(207)=-2.84, p<.01$) , 「新たな可能性」 ($t(207)=-2.96, p<.01$) , 「人間としての強さ」 ($t(207)=-3.32, p<.001$) , 「人生に対する感謝」 ($t(207)=-2.58, p<.05$) の得点において, 関係性攻撃タイプが言語的攻撃タイプよりも有意に高いことが示された。

各尺度間のパス解析モデル

仮説モデルを検討するために, 共分散構造分析によるパス解析を行った。なお, 各尺度間において Pearson の積率相関係数を求めたところ, 「被受容感」と「被拒絶感」, PTGI-J のすべての下位尺度の間に有意な相関が見られたため, 「被受容感」と「被拒絶感」の間および PTGI-J の下位尺度の誤差変数間に共分散を仮定した。そ

うえで, 「被受容感」「被拒絶感」から「自尊感情」および PTGI-J の各下位尺度へのパスと, 「自尊感情」から PTGI-J の各下位尺度へのパスがすべてある場合のパス解析を行った。続いて, 5%水準で有意でないパスを削除した結果, Figure2 のようなモデルが得られた。

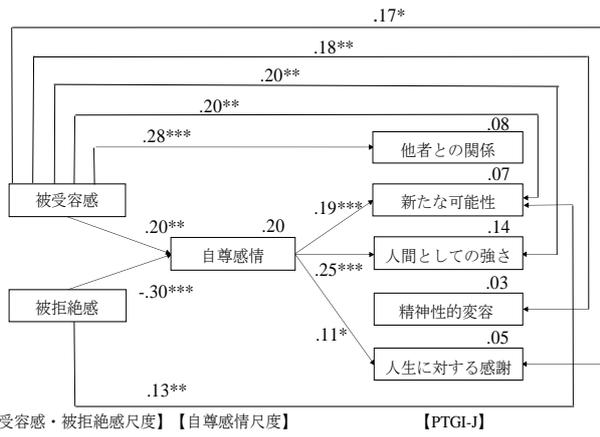
モデルのパス係数 (β) は, 「被受容感」から「自尊感情」 ($\beta=.20, p<.01$) , 「他者との関係」 ($\beta=.28, p<.001$) , 「新たな可能性」 ($\beta=.20, p<.01$) , 「人間としての強さ」 ($\beta=.20, p<.01$) , 「精神性的変容」 ($\beta=.18, p<.01$) , 「人生に対する感謝」 ($\beta=.17, p<.05$) への正のパスが確認された。「被拒絶感」からは「自尊感情」への負のパス ($\beta=-.30, p<.001$) , 「新たな可能性」への正のパス ($\beta=.13, p<.01$) が確認された。「自尊感情」からは「新たな可能性」 ($\beta=.19, p<.001$) , 「人間としての強さ」 ($\beta=.25, p<.001$) , 「人生に対する感謝」 ($\beta=.11, p<.05$) への正のパスが確認された。

さらに, 「自尊感情」の間接効果についての有意性を検討するため, ブートストラップ法 (標本数 2000) を用いてバイアス修正済み 95%信頼区間 (CI) を算出した。その結果, 「新たな可能性」「人間としての強さ」「人生に対する感謝」への標準化間接効果はそれぞれ, .04 (95%CI : .01-.09) , .05 (95%CI : .01-.11) , .02 (95%CI : .00-.06) であり, いずれにおいても 5%水準で有意であった。

Table2 各尺度の記述統計量と被攻撃タイプ別の差

	全体 (n=209)			関係性攻撃 (n=113)		言語的攻撃 (n=96)		t
	M	SD	α	M	SD	M	SD	
被受容感・被拒絶感尺度								
被受容感	30.26	6.15	.91	30.75	5.85	29.68	6.46	-1.26
被拒絶感	18.96	8.31	.89	17.73	6.80	18.22	5.16	0.55
自尊感情尺度								
自尊感情	25.09	5.12	.84	25.37	5.10	24.76	5.16	-0.86
PTGI-J								
他者との関係	16.93	8.31	.89	18.40	7.99	15.18	8.37	-2.84**
新たな可能性	11.32	6.41	.88	12.51	6.52	9.92	6.03	-2.96**
人間としての強さ	9.40	4.98	.84	10.43	4.78	8.19	4.97	-3.32***
精神性的変容	1.82	2.17	.77	2.01	2.35	1.60	1.92	-1.35
人生に対する感謝	6.33	4.00	.64	6.98	3.96	5.57	3.93	-2.58*

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

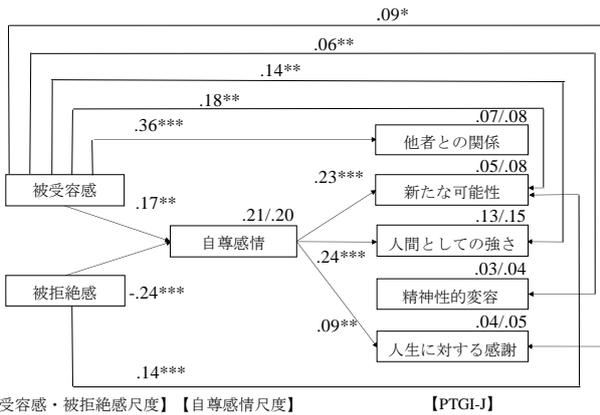


* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

$\chi^2(6) = 14.823 (p < .05)$, GFI = .983, AGFI = .898, CFI = .990, RMSEA = .084

注) 図が煩雑になることを防ぐため、誤差変数、外生変数間および内生変数の誤差変数間の共分散は省略した。

Figure 2 被受容感・被拒絶感および自尊感情と PTG との関連に関するモデル



* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

$\chi^2(34) = 41.432 (n.s.)$, GFI = .953, AGFI = .900, CFI = .992, RMSEA = .032

注) 決定係数の値は関係性攻撃タイプ/言語的攻撃タイプの順に記載した。

図が煩雑になることを防ぐため、誤差変数、外生変数間および内生変数間の誤差変数間の共分散は省略した。

パス係数の値と共分散および誤差分散には等値制約を課した。

Figure 3 多母集団同時分析の結果

モデルの適合度指標は $\chi^2(6) = 14.823 (p < .05)$, GFI = .983, AGFI = .898, CFI = .990, RMSEA = .084 であり、モデルはデータに概ね適合していることが示された。Figure 2 にパスの標準化推定値を示し、決定係数の値を長方形の端に添えた。

さらに、小田部 (2009a) のように、各攻撃形態によって心理的影響が異なるという指摘もあるため、仮説モデルについて、被攻撃タイプによる差が見られるかを検討するために、多母集団同時分析による検討を行った。全標本から得られたモデルをもとに、関係性攻撃タイプ、言語的攻撃タイプに分けて、多母集団同時分析を行い、パラメータ間の有意差について検討したところ、「被受容感」から「人生に対する感謝」において、検定統計量は 1.99 であった。絶対値が 1.96 以上であることから、言語的攻撃タイプよりも関係性攻撃タイプにおけるパス係数が有意に大きいことが示された ($p < .05$)。

そこで、「群間で制約を課さないモデル」「『被受容感』から『人生に対する感謝』にのみ制約を課さないモデル」「全てのパス係数、共分散、誤差変数間に等値制約を課すモデル」の 3 つについて、モデル適合の比較を行った。その結果、AIC は順に、143501, 117933, 117432 であり、「全てのパス係数、共分散、誤差変数間に等値制約を課すモデル」が最もモデルに適合していたため、このモデルを採用した。このモデルは、被攻撃タイプ間で諸変数間の関連性が等しいことを意味する。

モデルのパス係数 (b) は、「被受容感」から「自尊感情」 ($b = .17, p < .01$)、「他者との関係」 ($b = .36, p < .001$)、「新たな可能性」 ($b = .18, p < .01$)、「人間としての強さ」 ($b = .14, p < .01$)、「精神性的変容」 ($b = .06, p < .01$)、「人生に対する感謝」 ($b = .09, p < .05$) への正のパスが確認された。「被拒絶感」からは「自尊感情」への負のパス ($b = -.24, p < .001$)、「新たな可能性」への正のパス ($b = .14, p < .001$) が確認された。「自尊感情」からは「新たな可能性」 ($b = .23, p < .001$)、「人間としての強さ」 ($b = .24, p < .001$)、「人生に対する感謝」 ($b = .09, p < .01$) への正のパスが確認された。

続いて、「自尊感情」の間接効果についての有意性を検討するため、ブートストラップ法 (標本数 2000) を用いてバイアス修正済み 95% 信頼区間 (CI) を算出した。その結果、関係性攻撃タイプにおいて、「新たな可能性」「人間としての強さ」「人生に対する感謝」への標準化間接効果はそれぞれ、.04 (95%CI : .01-.08), .05 (95%CI : .01-.12), .02 (95%CI : .00-.06) であった。言語的攻撃タイプにおける「新たな可能性」「人間としての強さ」「人生に対する感謝」への標準化間接効果はそれぞれ、.05 (95%CI : .01-.10), .06 (95%CI : .01-.13), .03 (95%CI : .00-.07) であり、いずれにおいても 5% 水準で

有意であった。

モデル適合度は $\chi^2(34)=41.432(n.s)$, GFI=.953, AGFI=.900, CFI=.992, RMSEA=.032 であり, 十分な適合が確認された。採用したモデルの非標準化推定値を Figure 3 に示し, 決定係数の値を長方形の端に添えた。

考 察

本研究では, 傷つき経験後の被受容感と自尊感情, および傷つき経験を契機とする PTG との関連を検討することを目的とした。加えて, 上記の関連について, 被攻撃タイプによる差がみられるかを検討した。

はじめに, 各変数における被攻撃タイプ別の差について, 「他者との関係」「新たな可能性」「人間としての強さ」「人生に対する感謝」における関係性攻撃タイプの得点が言語的攻撃タイプの得点よりも有意に高いという結果が得られた。このことから, 関係性攻撃による傷つき経験を持つ者は, 言語的攻撃による傷つき経験を持つ者に比べて PTG を強く実感していることが推察される。このような結果が得られた要因として, 各攻撃タイプによる影響の差が考えられる。先行研究では, ストレスの程度が高いほど成長の程度も高いことが示されている (Park et al., 1996 ; Tedeschi & Calhoun, 1996) 。また, 小田部他 (2009a) によると, 関係性攻撃による傷つきの程度は言語的攻撃よりも高い。すなわち, 関係性攻撃タイプの傷つき経験は, 言語的攻撃タイプの傷つき経験に比べて強いストレスを伴う可能性があり, 経験時に感じたストレスの程度の差が PTG の実感の程度に関連した可能性があると考えられる。

続いて, 共分散構造分析によるパス解析を行ったところ, 以下のような結果が得られ, 仮説は概ね支持された。

まず, 「被受容感」が「自尊感情」と正の関連を示し, 反対に「被拒絶感」が「自尊感情」と負の関連を示し, 従来の研究 (滑川・横田, 2008 ; 岡田, 2011 ; 杉山, 2002) と一致する結果が得られた。

また, 「被受容感」から「他者との関係」「新たな可能性」「人間としての強さ」「精神的変容」「人生に対する感謝」への直接効果, および「自尊感情」を介した「新たな可能性」「人間としての強さ」「人生に対する感謝」への間接効果が確認された。

このように, 直接効果から「被受容感」は 5 領域すべての PTG と正の関連を示すことが明らかになった。これ

らの結果は, 他者からの受容感と, 危機的体験を通じた自己成長感との関連を検討した岩本 (2016) や, ネガティブな経験を肯定的に意味づけている者ほど他者からの支えを感じていることを示した松下 (2007) の知見と一致する結果であり, 本研究においても, ネガティブな体験からの肯定的な変化の過程に「被受容感」が関連していることが示された。また, 「自尊感情」を介した「新たな可能性」「人間としての強さ」「人生に対する感謝」への間接効果から, 「被受容感」は「自尊感情」を介しても, PTG と正の関連を示すことが明らかになった。これは, ソーシャルサポートが「自尊感情」を上昇させ, 希望を介して PTG を促進することを明らかにした Zhou et al. (2018) の知見と類似する結果であった。

一方で, 「自尊感情」を介した「被受容感」の間接効果は, 「新たな可能性」「人間としての強さ」「人生に対する感謝」の 3 領域においてのみ確認された。Calhoun & Tedeschi (2006 宅・清水訳 2014) によれば, PTGI で測定される 5 領域のポジティブな変化は必ずしも同一の過程を経て得られるものではなく, それぞれ別々の心理的過程を経て得られると考えられている。本研究の結果からも, 各領域における PTG が異なる過程を経て得られる可能性が示唆された。

次に, 「被拒絶感」が「新たな可能性」の領域における PTG と正の関連を示した。これは, 他者からの受容感が危機的体験を通じた自己成長感と正の関連を示す (岩本, 2016) という知見と照らし合わせると, 予想外の結果であった。このような結果が得られた理由として, 「被拒絶感」によって生じるネガティブな感情反応が関連している可能性がある。小林・大久保 (2020) によれば, 「被拒絶感」はネガティブな自己/他者スキーマを高める。上條・湯川 (2016) は, ネガティブ感情である悔恨によって, PTG の生起要因として重要な出来事に対する意図的熟考が促進されることを明らかにしている。悔恨は自分の行動や自分自身を否定的に評価したときに生じることから (上條・湯川, 2016) , 「被拒絶感」によってネガティブな自己スキーマが高まった際にも生じる可能性があると考えられる。したがって, 今後は「被拒絶感」と PTG を媒介する要因にも焦点を当て, PTG の生起メカニズムを詳細に検討する必要があると考えられる。

続いて, 本研究では, 多母集団同時分析を用いて, 被攻撃タイプによる諸変数間の関連を比較検討した。その

結果、関係性攻撃タイプと言語的攻撃タイプで、パス係数に等値制約を課したモデルが最もデータに適合していた。このことから、「被受容感」「被拒絶感」および「自尊感情」とPTGの関連の仕方は被攻撃タイプによって変わらないことが示された。これまでに、PTGの発生メカニズムはストレス体験の領域によって異なること（宅, 2005; Tedeschi & Calhoun, 2004）が明らかにされている。本研究で着目した関係性攻撃と言語的攻撃による傷つき経験は、体験の性質やその後の心理的影響は異なるものの、ともに対人関係上のストレス体験であるという点で共通している。したがって、今後は、より多様なストレス体験間における被受容感・被拒絶感、自尊感情、PTGの関連について比較検討することが求められる。

まとめと今後の課題

本研究の結果から、日常的な対人場面での傷つき経験を成長へとつなげていくために、経験後の「被受容感」を高める関わりが重要であると考えられる。例えば、近江他（2004）は大学生の「被受容感」を高める出来事として、自分が悩んだり困ったりしたときに力を貸してもらったり他者に頼りにされること、居場所があることなどを明らかにしている。また、5領域のPTGと「被受容感」「自尊感情」についてそれぞれ異なる関連が示されたことから、今後は各領域に対して異なるモデルの開発が必要であると考えられる。

最後に、本研究の課題として以下の3点が挙げられる。

第1に、本研究では傷つき経験がもたらすポジティブな側面としてPTGのみに着目したが、同時に傷つき経験がもたらす否定的な側面にも着目する必要がある。本研究では検討していないが、傷つき経験は、長期的に見た場合の様々な心理的不適応を引き起こすことが明らかにされている（小田部, 2008; 小田部他, 2009a）。武井・嶋田・鈴木（2011）はポジティブな捉え方とネガティブな捉え方は一次元の両極ではなく、独立して存在することを示唆しており、ポジティブな側面とネガティブな側面の両方を認識できるようになることが回復と関係している可能性があるとして述べている。そのため、成長のプロセスをより詳細に検討するためには、PTGと同時にネガティブな側面にも着目する必要があると考えられる。

第2に、本研究で収集されたデータは、回顧的な手法を用いた横断調査に基づくものであり、過去の傷つき経

験やその後の状況について当時の実態を反映できていないとは限らない。したがって、今後は追跡法による縦断研究を行い、傷つき経験の実態をより正確に把握した上でその影響について検討する必要がある。

第3に、全体的にパス係数および決定係数の値は小さかったため、傷つき経験後の被受容感および自尊感情がPTGに与える影響は大きくない可能性がある。そのため、今後はPTGに影響を与える他の要因に着目し、さらなる検討を行う必要がある。

引用文献

- Abraido-Lanza, A. F., Guier, C., & Colon, R. M. (1998). Psychological thriving among latinas with chronic illness. *Journal of Social Issues, 54*, 405-424.
- Ben-Ari, O. T., Shlomo, S. B & Findler, L. (2012). Personal growth and meaning in life among first-time mothers and grandmothers. *Journal of Happiness Studies, 13*, 801-820.
- Calhoun, L. G., & Tedeschi, R. G. (2006). *Handbook of posttraumatic growth—research and practice*. (宅 香菜子・清水 研 (監訳) (2014). 心的外傷後成長ハンドブック——耐え難い経験が人の心にもたらすもの—— 医学書院)
- Crick, N.R. & Grotpeter, J.K. (1995). Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development, 66*, 710-722.
- Crick, N. R., Werner, N. E., Casas, J. F., O'Brien, K. M., Nelson, D. A., Grotpeter, J. K., & Markon, K. (1999). Childhood aggression and gender: A new look at old problem. In D. Bemstein (Eds.), *Nebraska symposium on motivation* (pp.75-141). Lincoln, NE: Nebraska University Press.
- 橋本 剛(2003). 対人ストレスの定義と種類——レビューと仮説生成的研究による再検討—— 人文論集, 54, 21-57.
- 秦 一士(1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, 61, 227-234.
- Hirooka, K., Fukahori, H., Taku, K., Togari, T., & Ogawa, A. (2018). Examining posttraumatic growth among bereaved family members of patients with cancer who received palliative care at home. *American Journal of Hospice and Palliative Medicine, 35*, 211-217.
- 堀田 亮・杉江 征(2015). 大学生における重大なネガティブな体験についての探索的検討 健康心理学研究, 28, 41-46.
- 飯村 周平(2016). 心的外傷後成長の考え方——人生の危機とポジティブな心理的変容—— ストレスマネジメント研究, 12, 54-65.
- 石原 由美 (2013). 思春期・青年期における周囲の他者からの被受容感と自己の「本来感」の関連 九州大学心理学研究, 14, 117-124.

- 磯部 美良 (2001). 子どもの関係性攻撃に関する研究の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要, 50, 379-386.
- 岩本 寛子(2016). 青年期における危機的体験を通じた成長——他者からの受容に焦点をあてて—— 甲南女子大学大学院論集, 14, 1-8.
- Janoff-Bulman, R. (2004). Posttraumatic growth: Three explanatory models. *Psychological Inquiry*, 15, 30-34.
- 城 佳子(2012). 大学生の自己開示・ソーシャルサポートが被受容感に及ぼす影響の検討——被開示スキルとの関連を通して—— 人間科学研究, 34, 63-72.
- 上條 菜美子・湯川 進太郎(2016). ストレスフルな体験の意味づけにおける感情——出来事の種類の踏まえて—— カウンセリング研究, 49, 11-21.
- 川喜田 二郎(1967). 発想法——創造性開発のために—— 中央公論社
- King, L. A., Scollon, C. K., Ramsey, C., & Williams, T. (2000). Stories of life transition: subjective well-being and ego development in parents of children with down syndrome. *Journal of Research in Personality*, 34, 509-536.
- 小林 光栄・大久保純一郎(2020). 被拒絶感および被受容感が中核信念やストレス反応に及ぼす影響 帝塚山大学心理科学論集, 3, 21-28.
- 近藤 卓(2012). 自尊感情とPTG——SOBA-SETとPTGIによる調査から—— 近藤 卓 (編) PTG 心的外傷後成長——トラウマを超えて——(pp.29-36) 金子書房
- Leary, M. R., Springer, C., Negel, L., Ansell, E., & Evans, K. (1998). The causes, phenomenology, and consequences of hurt feelings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1225-1237.
- Losavio, S. T., Cohen, L. H., Laurenceau, J., Dasch, K. B., Parish, B. P., & Park, C. L. (2011). Reports of stress-related growth from daily events. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 30, 760-785.
- 松下 智子(2007). ネガティブな経験の意味づけ方と自己感情の関連——ナラティブ・アプローチの視点から—— 心理臨床学研究, 25, 206-216.
- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg self-esteem scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research*, 62, 589-594.
- 森田 美弥子(2011). 「傷つき体験」からの出発——小田部ら論文へのコメント—— 青年心理学研究, 23, 71-74.
- 永井 暁行(2018). 友人関係を通じた大学生の発達と適応 中央大学大学院文学研究科博士論文 中央大学
- 中野 慎也・稲谷 ふみ枝 (2008). 介護施設スタッフのソーシャル・サポートと被受容感・被拒絶感との関連——個人要因 (被受容信念) に着目して—— 日本心理学会大会発表論文集, 72, 367.
- 滑川 瑞穂・横田 正夫 (2008). 被受容感とソーシャルサポートの抑うつにおける抑制効果についての検討 日本心理学会大会発表論文集, 71, 399.
- 岡田 涼・小塩 真司・茂垣 まどか・脇田 貴文・並川 努 (2015). 日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析 パーソナリティ研究, 24, 49-60.
- 岡田 努(2011). 現代青年の友人関係と自尊感情の関連について パーソナリティ研究, 20, 11-20.
- 近江 則子・田名場 美雪・田名場 忍(2004). 大学生の被受容感・被拒絶感に関する探索的検討 弘前大学保健管理概要, 25, 12-19.
- 小田部 貴子(2008). 対人関係の中での「日常型心の傷」——歪められていく自己像/他者像—— 教育と医学, 56, 426-433.
- 小田部 貴子(2011). 新たな視点から「傷つき体験」にいかせまるか——松下・森田氏のコメントに対するリプライ—— 青年心理学研究, 23, 75-80.
- 小田部 貴子・加藤 和生・丸野 俊一(2009a). 「傷つき体験」の内実とその心理的影響の解明 青年心理学研究, 21, 17-29.
- 小田部 貴子・加藤 和生・丸野 俊一(2009b). 「心の傷」に関する諸研究をどのように位置づけるか——「日常型心の傷」を取り入れた新たな枠組みの提案——九州大学心理学研究, 10, 61-80.
- Park, C. L., Cohen, L. H., & Murch, R. L. (1996). Assessment and prediction of stress-related growth. *Journal of Personality*, 64, 71-105.
- Poling, D. V., Smith, S. W., Taylor, G. G., & Worth, M. R. (2019). Direct verbal aggression in school settings: A review of the literature. *Aggression and Violent Behavior*, 46, 127-139.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 櫻井 英未 (2014). 自尊感情の高さおよび変動性に関する研究——自己受容, 被受容感, 被拒絶感との関係から—— 日本女子大学人間社会研究科紀要, 20, 129-142.
- 杉山 崇(2002). 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究 心理臨床学研究, 19, 589-597.
- 杉山 崇・坂本 真士(2006). 抑うつと対人関係要因の研究——被受容感・被拒絶感尺度の作成と抑うつの自己認知過程の検討—— 健康心理学研究, 19, 1-10.
- 武井 優子・嶋田 洋徳・鈴木 伸一(2011). 喪失体験からの回復過程における認知と対処行動の変化 カウンセリング研究, 44, 50-59.
- 宅 香菜子(2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討——ストレスに対する意味の付与に着目して—— 心理臨床学研究, 23, 161-172.
- 宅 香菜子(2010). 外傷後成長に関する研究——ストレス体験をきっかけとした青年の変容—— 風間書房
- 宅 香菜子(2014). 悲しみから人が成長するとき——PTG = Posttraumatic growth—— 風間書房
- 宅 香菜子(2016). PTG とは——20年の歴史—— 宅 香菜子 教育デザイン研究第 14 巻 (2023 年 1 月) 107

- 子 (編) PTGの可能性と課題(pp.2-17) 金子書房
- 宅 香菜子(2021). コロナ禍と心の成長——日米におけるPTG研究と大学教育の魅力——風間書房
- Taku, K. & Britton, M. (2018). Relationships between self-esteem and posttraumatic growth among adolescents in the U.S. *Mental Health Family Medicine, 14*, 656-664.
- Taku, K., Calhoun, L. G., Tedeschi, R. G., Gil-rivas, V., Kilmer, P. P., & Cann, A. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. *Anxiety, Stress, & Coping, 20*, 353-367.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (1996). The posttraumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma. *Journal of Traumatic Stress, 9*, 455-471.
- Tedeschi, R. G., & Calhoun, L. G. (2004). Posttraumatic growth: Conceptual foundations and empirical evidence. *Psychological Inquiry, 15*, 1-18.
- Teicher, M. H., Samson, J. A., Sheu, Y., Polcari, A., & McGreenery, C. E. (2010). Hurtful words: association of exposure to peer verbal abuse with elevated psychiatric symptom scores and corpus callosum abnormalities. *American Journal of psychiatry, 167*, 1464-1471.
- 山田 剛史(2004). 過去—現在—未来に見られる青年の自己形成と可視化によるリフレクション効果——ライフヒストリーグラフによる青年理解の試み—— 青年心理学研究, 16, 15-35.
- Zhao, J., Kong, F., & Wang, Y. (2013). The role of social support and self-esteem in the relationship between shyness and loneliness. *Personality and Individual Differences, 54*, 577-581.
- Zhou, X., Wu, X., & Zhen, R. (2018). Self-esteem and hope mediate the relations between social support and post-traumatic stress disorder and growth in adolescents following the ya'an earthquake. *Anxiety Stress Coping, 1*, 32-45.